

続・辻山幸一新派を語る

——神戸在住レコードコレクター辻山幸一氏への聞き書き——

飯塚恵理人 大山範子 辻山幸一

前稿¹⁾で、神戸在住のSPレコードコレクター辻山幸一氏による新派の俳優達についての聞き書きと、それを補足する内容の手紙をまとめて紹介した。本稿ではさらに2021年11月6日に飯塚と大山が辻山氏の自宅を訪問し、氏のSPレコードをデジタル化した音源（ホームページ「恵理人の小屋」内のページ「辻山幸一コレクション 新派」(<https://zeami.ci.sugiyama-u.ac.jp/~izuka/erito1/09.10.tuji/>)で公開)を聞いていただきながらインタビューした内容を紹介する。本文中の人名等は前稿で紹介した丸井不二夫氏と永井孝男氏がまとめられた『新派の系図』²⁾、やはり丸井氏と伊和井康人氏が中心になってまとめられた『新派 年表』³⁾で漢字などを確認している。以下に、その際の録音テープを活字化したものを示す。
() 内は飯塚が補った。

(『カルメン』[カルメン：五月信子、ホセ：高橋義信、ニッソーレコード]を聞く。これはビゼーのオペラ『カルメン』ではなく、メリメの小説『カルメン』の翻案劇である)

飯塚恵理人(以下「飯」)「高橋義信。…これが五月信子って人の声なんですけど」

辻山幸一(以下「辻」)「僕は見てないからねえ」

飯「じゃ先生が実際にご覧になるより前の人と考えていいんですね」

辻「そう」(二人は大正から戦前に活躍した役者である)

(『カルメン』クライマックス)

飯「時代ですね」(高橋の台詞の言い方が歌舞伎のようで前時代的である)

(音源再生が終わる。辻山氏が丸井不二夫氏著作の本を取り出して飯塚に渡す)

飯「『大尉の娘』…というのがあるな。これ…藤村秀夫というのは何時ぐらいの人ですかね。藤村秀夫…この本に索引あるかな。」

辻「これは私がいらんこと言わんでも、これに書いてある通りで…。放送指示のことなど上手に書いてあるから」

飯「こういうのが残っているからありがたいです。先生、よくこれだけ(資料を)集めましたよね、ひと財産使っていますよね」

辻「(笑う) いやあ」

飯「何に惹かれてこれだけ集められたのかということをお聞きしていきたいですね。『大尉の娘』…藤村秀夫、花柳章太郎、大正13年頃」

(『大尉の娘』[露子：花柳章太郎、慎造：藤村秀夫]を聞く)

飯「これが花柳章太郎の声ということになっているんですけど」

飯「大正13年は今から何年前でしたか…」

辻「約100年前だね」

飯「これが花柳の？」

辻「花柳章太郎の声だね」

飯「花柳章太郎の声にはどういう特徴がありますか？」

辻「そうだね、まあ舞台上で張って言える声だった

ね。綺麗な…女形としてはきれいな方の声だね。何しろ声も姿も華のあった人。もうパッと出てきただけで、しなしなしなとするような感じの人。晩年の、ちょっと老けた役とか崩れた役とかで出てきた時も、それはそれで私は「ええなあ」と思っていた。とにかく声も姿も惚れ惚れした。また歌舞伎とは違う華があったね」

飯「先生が（花柳章太郎を）ご覧になったのは、もう中年以降？」

辻「そうそう。晩年まで華というものがあって崩れなかったし。それで役も良かったし。幸せだったなあ。それでまた男役も良かったんや。みやと松林で…（『金色夜叉』[お宮：水谷八重子、貫一：花柳章太郎]の音源がある）のあの台詞が良かったよ、『皇女和の宮』も。それでいて、その役した時、川口松太郎に「今度僕は髭を生やかすよ」と言って、舞台の見えが良かったというそんな話がある。（辻山氏は後で「最晩年の当り役だった『皇女和の宮』の師宮役で、花柳が髭を生やした。これは花柳の没後、17cm盤5枚組に収められている」と言われた）お師匠さんの喜多村緑郎と違ってそういうことを言われたら、声の調子をもう一つ外す人だった。緑郎の方はそういうことを言われたら声の調子を下げて。ある意味ねじくれている、そういうところがあったなあ」

飯「河合武雄は？」

辻「戦後の人」

飯「喜多村緑郎はいつ頃の人ですか？」

辻「喜多村緑郎は私、何遍も見えていますから」（『仮名屋小梅』[小梅：河合武雄、宇治一重：喜多村緑郎]を聞く）

飯「喜多村緑郎は一人じゃないですよね？」

辻「喜多村緑郎を名乗っている人は何人もいますから。この人はものすごく声の低い人だったんです」

飯「二代目、三代目ではなくて（初代ですね）。先生のおっしゃる喜多村緑郎は」

辻「そう。（この人は）百年生きた人だから。もう新派が始まった頃からほとんど減ぶ際まで生きた人。素人からいきなりポンと飛び込んで役者になった人。そしてものすごく皮肉な人だったらしい。芸でも、人が声を張って「ワーッ」とやったら、（自分は）ボソボソッと言うようなタイプの人。だから師匠として良いか悪いかは、ちょっと分からない。花柳章太郎が若い時お弟子さんに入ってしばらくした時、（喜多村緑郎が）舞台から降りて楽屋に帰ってきて気に入らないことがあったのか花柳をボカンと殴って、花柳が慌てて外へ飛び出していった。後で「すまん、ごめん」と言ってあやまったという話があるくらい気の短い人だったそうで」

飯「河合武雄と喜多村緑郎は？」

辻「河合と喜多村は、片一方（河合武雄）は陽で、片一方（喜多村緑郎）は渋くて陰ですよ」

飯「河合武雄は」

辻「私も見ていないからよく分からないですけど、戦前の舞台で片一方が張って物を言ったら、もう一方が陰で受ける。その陰陽が面白かった、二人の顔合わせはすごく良かったと言いますね。河合武雄はものすごく派手な芸風の人だったそうですね。だいたいこの人のお父さんが大谷馬十…二流役者で、その人の息子さんで」

（ちょっと音源を聞いて）

辻「これね、ここ喜多村ね。これは喜多村としてもかなりレコード（になるということ）を意識して、台詞を言っていると思う」

（鳴物が入る）

飯「本当に女の人が（出演者に）入っていなかったら歌舞伎だなあ」

（『塵境』水車小屋の場[お松：花柳章太郎、六造：藤村秀夫、仙吉：梅島昇]を聞く）

飯「今のは藤村秀夫？」

辻「藤村なら、レコードとしては花柳が入っていないと」

飯「花柳が入ってますね、藤村秀夫と花柳章太郎。
さっきのは花柳だったのかな？」

辻「花柳かな」

辻「藤村の方は関西で活躍していたんじゃないかな。東京に帰って空襲で死にかけたから。藤村をどうやって助け出したかという話が丸井さんのテープに残っている。あの頃の時代ですね」

(別の音源を探す)

飯「木下吉之助って？」

辻「女形でしょう」

飯「聞かれたことがあります？」

辻「うん。だけど私は見てはいない」

(『三人の母』[お由:木下吉之助、米子:三好栄子、千恵子:浪花千栄子、幸一郎:伏見正光、藤吉:東光雄、先生:高田亘、亮一:三上慎之助]を聞く)

飯「木下吉之助、三好栄子、浪花千栄子…」

辻「それは関西やね。関西新派」

(聴きながら雑談。歌舞伎の声色や慶応大学歌舞伎研究会の話をする)

辻「歌舞伎を舞台でしていた連中の中で一番良かったのが大谷、後に嵐徳三郎になった人ですね。彼を欲しかったために、十人かそこら学生歌舞伎の連中を関西歌舞伎に引き入れたんですよ。まあ皆辞めてしまったんですけど…残ったのは一人だけかな」

飯「川田芳子というのは童謡歌手でしたか？」

辻「そう、童謡歌手です。私、子どもの時にSP盤の童謡を聞いたことがある」

飯「『阿波鳴門』が先生の(デジタル化音源)にあるんですけど」

(『阿波鳴門』[説明と十郎兵衛:中村声波、お弓:川田芳子、お鶴:藤田陽子 ビクターレコード 50495-6]を聞く)

飯「これはお弓が川田芳子なんです。分類では「新

派」になっているんです」

(冒頭の語りを聞いて)

飯「ちょっと関西新派ですね」

辻「そうですね」

(お弓が両親の名前を言う場面)

飯「お弓が川田芳子」

辻「この場面、丸井不二夫さんが家を飛び出して金沢から一座に入って、子役でこの役をしたと言ってたかな。あの頃の能登半島の劇場はデッキ(高さがある舞台のことか?)のない劇場があって、私、砂かかり(砂かぶり?)で芝居見た覚えがありますよ」

(『満州事変 中村大尉篇』を聞く)

飯「これが都築文男の声ですか？」

辻「この人は不幸な最期だったんだよね、満州かなんかで」

辻「満州から帰ってきて成功した芸人といえば…」

飯「まあ、藤山寛美とか」

辻「そう藤山秋美の子やね」

辻「それから落語家の…春風亭じゃなくて…最後に独立した…」

飯「六代目三遊亭円生」

辻「あの人も満州から帰ってきてから芸が上がった。あの人のテープをいろいろ引っ搔き回していたら、古い人情噺がたくさん出てきた。5年か6年か続けてあちこち(の高座を録音したのをまとめ)ると噺が一つにつながるんですよ」

(人情噺や怪談噺は長いものが多く、現在はそれをいくつかに切ってそれぞれを独立した噺として高座に上げることが多い)

(『不如帰』(諸口十九、川田芳子。ニッソーレコード1096)を聞く)

飯「諸口十九というのはいつの時代ですか？」

辻「この時代やね」

(『新派 年表』によると諸口は大正5年12月、6年1月の東京赤坂演技座、7年11月の大阪弁天座、

8年2月の京都明治座に出演している。「現代劇一派」の役者)

飯「都築文男などと同じくらい？」

辻「そう、戦前の人」

(童話劇『青い鳥』思い出の国の場 [大正9年2月11～17日、東京有楽座、チルチル:水谷八重子、ミチル:夏川静江、おぢいさん:奥村博史、おばあさん:深川千草 TOKYO Record 3189]を聞く)
(この音源は水谷八重子が子どもから大人になる初期の録音と考えられる。水谷八重子第二次芸術座の録音である。しゃがれ声で良い声ではない。夏川静江と共演)

辻:水谷八重子の地声は低かったが、舞台では張って発声して、三階まで通る声だった。女形と対抗できる声だった。

また辻山氏と飯塚は今年度も手紙のやり取りをしているが、その中で辻山氏がこの聞き書きの内容をフォローする事柄をいくつか書かれているのでそれも紹介する。()内は飯塚が補った。

・2020.12.8付辻山氏からの手紙より

花柳章太郎と言う役者はすばらしかった。『遊女夕霧』。丸井さんが、花柳が亡くなってずっとあとでNHKに残っているテープで鑑賞会をした時に「終わって皆泣いてたもの」と言っていた。すばらしい芸だった。それが、舞台は円玉の住居の二階という設定。大矢市次郎、英太郎、花柳章太郎の三人だけ。花柳の地味な姿の新潟弁の遊女、講釈師の聞き取り書きをしている元講釈師 (の大矢市次郎)、その女房の (二代目) 英太郎。

(英は) 顔をしてるかどうかの素に近い、相槌を打つ場面で「グッとおやりよ…」「いただきます」のなんともいい間のセリフの受け渡し。若い頃には主役を張っていた人が脇にまわったことのすばらしさ。英と言え、娘の「つや子」(養女の英つや子)。いい役者でした。きれいで… (中略) 英の最後の舞台は『太夫 (こったい) さん』だっ

たと聞いている。その英を背負って走ったのが丸井さんだった。(英は1979年4月の明治座『太夫さん』の薄雲太夫役で出演中に具合が悪くなり、病院に搬送され翌日死去した) つや子も英が亡くなって新派から去って京都にもどった。一人の新派の名優がこの世から亡くなった。(中略) 英の円玉の女房役は花柳と大矢の会話にスーッと入ってくる間が絶妙なのだ。(中略) 私の思うのでは、お盆にのせた湯呑を付人から受け取った瞬間がその時である様な気がする。この人の年月を経た自然な芸が、あの名舞台を生み出したと思っている。花柳の華のある芸との差が、何度となく見た他の英の芸の面白さだったのだと思う。

それに対して花柳の芸は舞台をこしらえていくその軌跡を楽しむところにあつたのではない、そんな気がする。『太夫さん』の舞台、同じ大矢市次郎と二人であの間口の広い舞台を進めていく、それも会話だけといふ途方もない芸の力を味わえたのは、私の観劇生活の中での幸せの一刻だったと思っている。台詞一言一言と仕種が「やってるな」と思いながら引き込まれて行く面白さ、大矢と二人の舞台。そんな役者はもういないし、今の世の中、もう出ないだろう。喜多村緑郎の『日本橋』での台詞を唄って、それが素にもどる楽しさはなかった。これは大阪では松竹新喜劇で藤山寛美の見せた台詞の活け殺しの上手さ、つまり新派の芸の頂点だと思う。(以下略)

百年で亡んだ「新派」といふジャンルの演劇、それはこういった「花柳」であり「大矢」であり「英」という「役者によって支えられた演劇の一つのジャンル」という結論になるのかもしれない。

・2021.3.5付辻山氏からの手紙より

花柳の立役、初演からの持役です。泉鏡花の原作を久保田万太郎が脚色しました。どの年表などを見ましても横に括弧付の但し書がないのですが、実は初演は第一幕のみだったのです。原作を読んでも分かるのですが、鏡花の原作は地の文が多くて台詞に転換するのがむずかしいから

だったと思います。花柳十種の中での男役『鶴八鶴次郎』と双璧だと思いますが、他に『残菊物語』と『皇女和の宮』の有栖川の宮を上げてもいいと思います。花柳が川口松太郎に言ったという言葉が「僕が今度髭を生やかすよ」と言ったそうで、女形がついには髭ということになったのが、意外に似合ったことを覚えています。花柳という人は何か必ず帰途につく時「あ、あそこがよかった」というお土産を持たせてくれる人でした。

さらに2021年12月26日に辻山氏が電話で補足をして下さった。以下がその内容である。

花柳章太郎の男役で目に残っているのは『歌行燈』の恩地喜多八である。江戸前のすっきりとした喜多八だった。同様に花柳章太郎の男役での当り役は『婦系図』の早瀬主税である。これは当たり役なので戦前から何回もやっている。お薦めが水谷八重子の時には、絶世の美男美女のすっきりとした悲劇でとても良かった。花柳章太郎の男役で他には『残菊物語』の尾上菊之助役がわりりしくて良かったが、この時には五代目菊五郎役の喜多村緑郎も江戸前のすっきりした美男で良かったことを覚えている。そして老け役の北条秀司作『京舞』の片山春子も面白かった。

英太郎は、晩年は脇役にまわっていたが『遊女夕霧』での花柳章太郎の新潟弁の遊女、元講師の大矢市次郎、そしてその妻の役で主役級の二人の話に相槌を打つ時なども、なんとも間が良くて良かった。英といえば、火野葦平作『花と龍』の舞台化で、準主役の女親分役が、意外に貫禄があってなかなかのものであった。芸の引き出しが多かった。戦後の新派は英太郎が脇にまわったように、台詞のある女中さんをさせると逸品の瀬戸英一など、脇役で輝くタイプの役者が数多くおり、観客としては「この役者は、何時どの役で出てくるかな」と考えながら劇場に向かう楽しみがあった。

注

- 1) 飯塚恵理人・大山範子・辻山幸一「辻山幸一新派を語る―神戸在住レコードコレクター辻山幸一氏への聞き書き―」 嵯山女学園大学文化情報学部「嵯山女学園大学文化情報学部紀要」第20巻、2021年3月発行、P.33-38
- 2) 『新派の系図』永井孝男・丸井不二夫編、劇団新派、1977年5月発行
- 3) 『新派 年表』劇団新派(丸井不二夫・伊和井康人)編、大手町出版社、1978年10月発行

謝辞

貴重な談話とお手紙を下さいました辻山幸一氏に心より感謝申し上げます。本研究は2021年度嵯山女学園大学個人研究費(飯塚分)の成果の一部となります。

いいづか・えりと/文化情報学部教授

E-mail: erito@sugiyama-u.ac.jp

おおやま・のりこ/神戸女子大学古典芸能研究センター
非常勤講師

E-mail: ohyama@yg.kobe-wu.ac.jp

つじやま・こういち/レコードコレクター

